

## 学位論文内容要旨

### キリシタン時代における異文化受容に関する研究

山口 昌志

本論文は、1549（天文18）年以降、急速に広まったキリスト教という異文化が、どのように日本人に受容されたかについて、これまであまり焦点が当てられなかった棄教者や、キリシタンとしては入信しなかった人々に見られる異文化受容といった側面から、検討を加えたものである。

第一部第一章では、日本人キリシタンの中でも、最初に熱烈な信仰心を見せたものの、途中で信仰の道から外れた修道士であり、背教者である不干ハビアンについて、従来研究を整理しながら検討を加えた。第一節では、従来研究に従いながらハビアンの生涯を辿るとともに、これまでに指摘されている退会の動機について確認した。また、イエズス会の『会憲』を参照し、退会や背教行為の定義を確かめ、退会後の復帰規定等の存在を確認した。続く第二節においては、先行研究の指摘するハビアンの退会動機を改めて検討しながら、ハビアンの人となりを検討し、信仰の程度や活動内容に平均以上の形跡が見られるものの、他の日本人修道士を遙かに上回る才能までが見られるわけではなく、ハビアン自身も、それほど己惚れる環境にあったわけではないと指摘した。また、『破提字子』に記された、「向後ハ日本人ヲ伴天連ニスルコト勿レトノ義ニテ、皆面白クモ存ゼズ」という、今後は日本人を司祭にしないというイエズス会の方針に多くの日本人が反発したという記述は、ハビアンの退会后に下された決定であり、ハビアン自身の退会とはさほど関わりがないのではないかと指摘した。そして第三節において、ヨーロッパ宣教師の報告から、退会の最も主要な原因が女性問題にあった点を確認するとともに、「説明する必要がない」として、貞潔面の価値や、非合理的な価値観を強いるイエズス会内部の教育方針等に問題があり、多くの日本人聖職者との感覚的な齟齬を来していたのではないかと指摘した。元々仏僧であったと考えられる不干ハビアンは、青年期にキリスト教という異文化に触れ、熱心にこれを受容して若い日本人聖職者のリーダー格にまでなつたと見ることができる。とはいえ、学習内容や活動は、傑出したものであるとまでは言えず、何人かの優秀な宣教師の一人として活躍していた中で、女性問題によりキリスト教から離れた。とはいえ、ともに教会から離れた修道女とは、その後も一緒に暮らしており、結婚したと考えられる。すなわち、不干ハビアンの活動及び脱会と背教は、当時の日本人キリシタンが見せた行動の一例に過ぎず、『妙貞問答』『破提字子』の執筆といった特徴的な事跡があるにしても、それほど特異な存在ではなかったとした。

続いて第二章においては、従来あまり検討されてこなかった、不干ハビアン以外の日本人修道士の退会事例を検討するとともに、ハビアンの動向との比較を行った。具体的には、アジュダ宮殿付属の図書館に収蔵される『アジアのイエズス会 (Jesuitas na Asia)』の退会者名簿と、J・シュッテ編纂のイエズス会士名簿とを訳出するとともに、他の宣教師報告等に記載される行動を併せて検討を加えた。前者の名簿には、日本人以外の修道士も

含め、25名の退会事例が記載されており、後者には10名が記載されていて、一部が重複する。これらの検討の結果、信仰の程度はともかくとして、「自己抑制」の欠如や、「誘惑」に負けたといった、女性問題と思われる理由で退会を命じられている者や、自ら退会していった者が確認できた。また、近江ジョアンという、不干ハビアンには「同級生」ともいえる優秀な人物が、ハビアンと同様に退会し、背教行為を働いたことも分かった。不干ハビアンとの類似点は多く、当時の日本人聖職者は信仰に迷い、悩みながら異文化受容を進め、ある者は殉教さえ厭わずに信仰を貫き通し、ある者は受容したキリスト教から離れ、背教行為さえ行ったものとした。

さらに第一部第三章では、キリスト教から離れる行為を表す「ころぶ」という用語について、語源や、用語に込められた意識を探ることで、当時の日本人キリシタン及びキリスト教を弾圧する側に立った日本人が、信仰から離れることについてどのような理解を持っていたか検討した。第一節では、幾つかの用例を参照しながら、「ころぶ」の一般的解釈を確認し、語源については、『南蛮寺興廃記』が言うような「倭責め」とは、直接的には関わりないことを確かめた。第二節では「ころぶ」と「立ち上がる」「立ち帰る」との関わりに触れ、続く第三節において、重大な棄教行為を表す「そむく」が、「ころぶ」の定着以前から用いられていた例を確認した。さらに第四節において、現代の聖書用語である「つまずく」について確認し、当時は「えすかんだろ」という原語が用いられており、「ころぶ」より弱い、違反状態を表している例を確認するとともに、信仰を道に喩える中で、「つまずく（えすかんだろ）」からの連想により、「ころぶ」が用いられるようになったという仮説を示した。これにより、キリシタン側が「ころぶ」を用いる時には、信仰への復帰が期待されており、逆に弾圧する側が用いる側は、常に「立ち上がる」として信仰へ復帰する危険性を持ち続けることになったとした。

そして本論文の第二部では、江戸時代における戒律復興運動の端緒となったものの、従来あまり検討がされて来なかった律僧明忍について詳細に検討することで、キリスト教信仰とは違う形で異文化を受容したであろう当時の人々の一例を確かめた。まず、第二部の第一章では、第一節において、明忍に関する各僧伝類について整理し、それぞれの成立過程を検討した。その結果、明忍に関する僧伝は幾つも確認できるが、漢文による僧伝には二系統あり、それぞれ、明忍に対する評価の高まりを受けながら作成されたと考えられるが、いずれも『明忍律師之行状』に行き着くことを確認した。また第二節において、明忍についての基礎的な事跡についての確認を行い、明忍研究の基礎となる情報の一端を示し得た。この作業を通じ、在俗時代の明忍が属していた清原家には、清原枝賢や、細川ガラシアの侍女となった糸（清原マリア）等、キリスト教思想に触れた人々があり、明忍もまた、青年期にキリスト教思想に触れた可能性がある旨、指摘した。

次の第二部第二章においては、明忍の生涯について、親類でもあった清原（舟橋）秀賢の日記や、明忍自身が書き写した経典や公的文書の奥書等を参照することで、第一章に引き続いて細かく確かめた。その結果、在俗時代の動向について確かめた第一節において、清原賢好と名乗った明忍が、神皇正統記の筆写等を通じて日本神話にも触れている点や、

清原秀賢とともに『令集解』の筆写等に精勤している様子を明らかにした。さらに第二節において、經典類の奥書から、僧伝類で曖昧な出家年代を1599（慶長4）年だと特定するとともに、当初は以白と称していた僧名を、明忍と改めたのは自誓受戒の直後であろうと指摘した。そして、出家直後は、なおも清原秀賢との交流など世俗生活と同様の生活を続けていたが、次第に仏道修行に邁進するようになって行く過程を見た。さらに第三節では、自誓受戒の影響としては、戒律研究の先人である明恵や俊苧を慕うところが大きかった点を指摘した。そして第四節において、渡唐に向けて出立した時期について、僧伝の記述とは異なる点を指摘しながら、平戸の松浦氏と清原秀賢の関わりから、明忍が最初に平戸に赴いたのは、松浦氏の協力を得ようとした可能性が高い旨を指摘した。さらに、対馬に渡った際は、宗氏が始めていた李氏朝鮮との交渉に参加しようとしたのではないかという仮説も示した。いずれにしても、明忍は、出家を決意した時点で、仏教に関する深い知識を持っていたわけではなく、少しずつ学習を重ねながら、やがて戒律を重視するに至ったことが確認できた。

そして第二部第三章において、明忍が青年時代を過ごした清原家を中心に、明忍の周辺人物を探ることで、後年の戒律重視に至る彼の思想的背景を明らかにすることを目指した。この結果、第一節では、慧雲寥海ら明忍とともに自誓受戒を遂げた友僧や、その同僚僧侶の動向を確かめたが、明忍が、彼らから渡唐を志すに至るまでの影響を受けた形跡までは確認できないとした。その上で第二節では、師の晋海と、生家である中原家について検討を加えた。晋海については、清原系図等で「真海」とされるなど、若干の問題もあるが、同一人物と見て良く、清原秀賢に加えて、明忍に大きな影響を及ぼした清原家の人間であることを確認した。他方、中原家からの影響はさほど受けていないと考えられることを指摘した。そして第三節において、清原家の人的ネットワークの大きさに触れ、明らかにキリスト教を受容した形跡のある秀賢の祖父である清原枝賢や、糸（清原マリア）が、明忍に影響を及ぼしうる立場にあったこと、また、そもそも清原家が、朝鮮文士を迎えたり、呂宋国王からの手紙を読む等、多様な異文化がもたらされる環境にあったことを確かめた。そうした清原家におけるキリスト教理解の程度について、第四節で検討を加え、特に黙想の実践に関しては、多くの人々に共有されていたのではないかと指摘した。そしてキリスト教における黙想の実践と、明忍ら取り組んだ自誓受戒の共通点を示し、明忍が最終的に渡唐を志すに至るのには、信仰のため異国からはるばる海を越えてやってきたヨーロッパ宣教師たちの存在に影響を受けたことが想定できるとした。

以上のように、本論文では、まず第一部において日本人キリシタンについて扱い、続く第二部において、仏教の戒律復興運動について扱うという構成を取った。一見するとまったく異なる世界の人々についての研究のようであるが、清原家が新しい文化受容に熱心であったように、入信はしなくても、多くの人々がキリスト教文化を受容したことは間違いなく、引き続き多くの事例を確かめながら、日本人の異文化受容の問題を検討して行きたい。

(4065字)